



すみくらまりこ詩集

春

序文 ダンテ・マッフィア

JUNPA BOOKS

すみくらまりこの詩

すみくらまりこの詩は、蝶の飛翔のように軽やかに見えるため、即座に読者的心に押しつけられるが、その多目的な性質、不安、世界の構造と力学を解読したいという願望がすぐに明らかになる。

まりこは感情の本質を捉え、それを詩的な口述の優雅さで味付けしているが、夢、つまり生活の裏側、計画を続けるために、日常の現実の重さと折り合いをつけることは決してない。

それはあたかも詩人がその考えが彼女に示唆する震えを感じて花束を作ったかのようだが、それは美的要素だけでなく、倫理的で献身的な要素にも左右される。そのため、彼女がイメージを刺繡する際には、人間の状態に焦点を当てる超えて、突風だけに頼ることを避ける理由が常に現れる。

私は常に、詩は存在し、ページを読むときにのみ、魂の温かさ、心の感情、存在の本質を感じることができると主張してきた。 そうでなければ、それは優れた、または優れた文学であり続けますが、詩はそうではない。

私はこの点で多くの論争を巻き起こし、賞賛され祭壇に供えられた一部の詩人は永遠の世界と鼓動を創造することに成功したという栄誉には値しないが、人々に信じさせるまでに磨き上げた素材の解釈者であったことを証明した。彼らは、言葉に生命と息吹を与える、穏やかな黄金の風をなんとか掴んでいたのだ。

詩は別のものだ！

偉大な画家（画家よ、注目してくれ）であるエノトリオは、詩は何からでもできているように見える、なぜならそれは美と愛の親密な理由を追い求めて走るため息だから、と言った。それは冷たい構築ではなく、「美しい文字」の完璧で賢明な足場だ。

ここで、まりこの詩には、言葉の温かく芽生えた息吹がすぐに感じられる。彼女は表現を操作せず、捉えどころのないデザインにせず、逆に読者を抱きしめて巻き込み、謎への訪問、魅惑のかけらと新たな謎を残す妄想への訪問と一緒に実行する。

すみくらまりこの詩のもう一つの大きな利点は、偉大で素晴らしい日本の伝統を裏切ることなく、その重みから逃れることができたことであり、逆に、最高の部分を最大限に引き出し、稀有な繊細さを加えて抒情的な推進力を加えて復活させたことである。それは神話にもつながり、そこから深遠な真実の瞬間が解き明かされる。

明らかに、私たちが目の前にある表現上の目標を達成するために、徹底的に生きなければならない一連の経験を経なければ、そのような洗練を達成することはできない。

端的に言えば、すみくらまりこは日常生活、本、夢を題材にした詩を書く詩人であり、その結果として私たちが成り立つことを可能にするこの豊富な瞬間が生まれ、それが成り立つことと元に戻ること、その到達不可能な道、そしてその魅力を解き放つ。ただ眩しい。

ダンテ・マッフィア

目次
すみくらまりこの詩

春

夢を宥める

汀にて

すべて嘘

月のしずく

寂しい手の歌

バラの蒸留

こころの象 (かたち)

京に生きて

一灯

ある調香師の恋

存在の糸

虚実不明

黒真珠

古楽器

メリーゴーランド

詩の花

静かな狂想曲

自縛

風笛

白魔

風化

聖蛇

夜の女神

何も知らない

檸檬の滓

凍て鷺

氷の花

雪女

夢の抜け殻

甘い毒

狼の一途

樹液

愛の薪

孤独の波

焚火

わたしという物質

わたしは女

夢でなく

夢の余波

青い翼

終章

雨傘

クロノス

甘い魔物

春の宵

落着

桜を抱く

時の縛り



collana di poesia dal mondo

Il tè nel deserto

Mariko Sumikura
PRIMAVERA

prefazione di Dante Maffia

春

静かな国の
静かな桜が
静かに咲きます

静かに待ちます
真夜中あなたが
会いにくるのを

木の肌に耳を当て
樹液が昇るのを
お聴きになりませんか

静かな国の
静かな桜が
静かに咲きます

夢を宥める

わたしの手を
親指で撫でつつ
求めるあなたは
乳をねだる赤児
子宮に響く

汀にて

波に洗われる細石は
これ以上行くところがない
どの砂粒にも愛の物語がある
隣の粒と擦れあって
いつかは真砂となる

すべて嘘

AI が詩を書くという
愛の詩なら上手いという
しかしすべてが嘘だ
それは涙をこぼさない
自分の優しさに泣かない

月のしづく

あこや貝の肉に
プラスチック核を埋められ
海に吊るされて四年め
愛の言葉で覆われた珠は
虹色に現れ 優しく光る

寂しい手の歌

右手はよく使うので
優しく温かいけれど

左手は動かないで
氷のように冷たい

こんな寂しい手から
熱い愛を綴っている

右手でここにちは
左手でさようなら

バラの蒸留

朝摘みのバラは
沸騰、冷されて
いま香精だけが
ガラス管を滴下する
夢を象るために

こころの象（かたち）

雪がはらはらと
わたしに積もり
わたしの手を隠す
わたしの足を隠す
でも熱い心の形が...

京に生きて

静かな舞いは
どの瞬間を切り取っても
一幅の画になるように

わたしの静謐な人生は
どの一刻を切り取っても
一編の詩になる

一灯

資産ゼロから生まれ
資産ゼロで去るが
この心の暗闇を
照らす一灯が
わたしには
恵まれた
良い友
詩歌
愛

今
思う
二人の
不思議な
運命のこと
逢うべくして
逢えたことわり
ヤコブの泉で
サマリアの
イエスが
女と話

した
事

ある調香師の恋

その女は花の香り
シトラスの香り
それも青いの
熟したのを
滴下して
一つに
する

そして白檀と
乳香の瓶を
手に取り
数時間
悩み

たった一つの
この恋の様
艶かしく
儂くも
香り

幽かに在り

雅を醸す
唯一の
女の
命

戀う気持ちが
高鳴る動悸
上がる熱
混ぜて
完成
す

存在の糸

心まで
魂の糸で
次のステップ
ダンテ・マツフィア

わたしが存在の糸だって
あの人がそう云っていた

わたしがいなくなったら
繋がっていた糸が切れて

まるでクレバスに落ちて
戻らないような言い方だ

わたしは嬉しく思えたし
そこには他の人物がない

恋は第三者が
介在した瞬間に

崩れてしまう砂のお城だ

だから二人だけで十年も

この存在の糸は貴い糸で
わたしもこの世と繋がる

どちらかがいなくなれば
クレバスと一緒に落ちる

II

そうして死ぬのではない
存在の場を変えるのだ

異時系列一そこへ
スッと入り込むのだ

わたしたちに最上の
存在場所がある

宇宙船に乗って出奔する
それは急ぐまでもない

まだ二人ですべきこと

残されているから

そんな夢を見るわたしは
罪人でしょうか。

虚実不明

それは事実なのか
それは虚構なのか

誰にも分からない
いつまでも不明で

美しく 悲しく
切実で 大胆で

愛が 愛以上で
言葉が言葉以上で

二人が愛し合った
その接点があった

その告白もあるが
嘘かも知れないし

虚実不明の物語
終わりなどない

黒真珠

黒蝶貝が宿す
稀なる真珠

微かに青緑が
海の碧と
藻草の緑が
母を恋い
産地を恋い
潮水を恋い
その揺れを恋う

わたしも
塩の味がして
鉄の匂いがする
赤い血がめぐり
その海を恋う

古楽器

長らく
布で覆い
触れられず
弾くでもない
捨てるでもない
ただ齡だけが増え
神様すら忘れた存在
そんな楽器がある日に
醉狂な詩人が弾いてみた
上手く弾く自信があり
百戦錬磨の達人なら
東洋の楽器を手に
響かせたいとの
熱望が逸った
弓が弦の上
そろりと
うごき
出す

まだ
胴体の

年代物の
空気があり
上手く振動を
させられるのか
心配は無用だった
弦は緩んではいたが
切れていなかつた
速いリズムから
アダージョへ
そして恋の
高まりを
歌つて
いた

メリーゴーランド

果たして
これは夢か
懐かしい未来
木の馬や馬車が
スチームパンクの
過去の亡骸をまわす
使い古して捨てられた
鉄が息を吹き返して
嬉しそうにまわる
それでも思い出
いつも温かく
お母ちゃん
手を振り
見てる
笑顔
で

詩の花

たくさん書き散らす
とりとめのない詩
これらは文字の
羅列であって
命を持たず
まだ種に
過ぎず

人様に
読まれて
愛されての
生長を待つ間
詩となり花つけ
いつか心に咲ける
そう信じてきょうも
厭われても詩を届ける

静かな狂想曲

木々を植え
木々を伐採し
風景を変えるも
人間の力か奢りか
黒い森の夜では
静かな狂想曲
それは聴覚
人間より
鋭くて
木は

根が
聴覚器
聴いたり
触れ合って
隣の木と話す
冬がくれば葉に
落ちる指令を出し
春がくれば芽を出す
木々の情報網には
互いの話を聴き

面白過ぎる夜
歌まで歌う
愛し合う
木々も
いる

自縛

この
心身を
縛るもの
常識であり
自分が作った
限界であったり
人に望まれる夢や
叶わない理想しかり
全部取り払い裸に
純心だった頃を
美しかった姿
恥ずかしい
ためらい
こころ
思い

自縛
制限を
破ること
殻を認めず
伸び伸びする

柔らかい心身は
誰にも遠慮しない
愛もそうだから
貫いていこう
人間だから
限界など
無いも
同じ

風笛

ヒューヒューヒュー
雪女が泣いている
何が悲しいのか
婚家に疎まれ
赤児を置き
逃げ来た
裸足の
雪女

もう
行く処
行く宛も
なく彷徨い
赤児のお包み
掴んで踊ってる
仏様に抱かれ
尊く美しく
狂おしい
母の愛
眠る

白魔

ホワイトアウト
一面が雪では
方向感覚が
狂うのだ
それも
我家

近く
そこで
力尽きた
悲しい人が
あつたそうだ
じっとすれども
凍えてくるし
動くほどに
体力失せ
白魔が
襲う

空が
明るく

なるまで
一人で外に
出るなと戒め
じっと部屋の中
毛糸でも編んだら
ブランケットが
出来ると喜ぶ
いつも読書
している
わたし
と彼

風化

心は
潤いが
なければ
荒んでくる
何が悪いのか
誰のせいだとか
終いには的を探し
無きものとするまで
心は潤いが必要なのだ
あるいは干からびて
さらに時が経って
風化の道を辿る
剝きな顔つき
共感の心を
なくす迄
砂漠に
なる
迄

詩

は雨
優しさ
ことばを
シラブルを
砂漠に降らす
それでも吸われ
すぐには変化せず
粘り強い努力と知恵
後世のために続け
ようやく苗木に
緑の芽が吹き
希望の空が
見守れる
いつか
緑化
を

聖蛇

多くの毒を吐き出すため
一つの口では足りない
ローマ神話に登場の
双頭蛇は両端に頭
そのうち有翼蛇
竜と変わって
今となつた
多すぎる
毒には
多頭

新年
早々に
神話をば
取り上げて
聖獸に混沌の
天災人災事故の
救済を願うわたし
何も力のない一般人
間違っているのかしら
少なくともゲームは

解決するコマンド
埋め込まれてる
タイミングと
伏線を整え
すべてが
発動し
終る

夜の女神

犬啼く
分岐路や
暗い夜道の
三叉路に立つ
夜の女神が云う
本当にそっちなの
良いのねと念を押す

今なら引き返して
選び直すことも
できるわよと
低く囁くが
もう大分
来てる
岐路

決断
大きな
決断でも
小さなもの

日日の事でも
毎朝に祈るのは
この道が正しくて
明るくて良いほうへ
導いてくださいと
いうこと自分が
引受けるから
納得できる
決断をし
決めて
実行
す

何も知らない

聖夜に
沈思する
このわたし
何も知らない
喜び方を知らず
怒り方も知らず
お金の使い方貯め方
愛し方愛され方知らず
歌い方弾き方を知らない
誓い方も言葉の選び方
お金の儲け方知らず
天の恵みで生きる
この齢になって
何も知らない
恥ずかしく
詩を書き
思いを
込め
る

檸檬の滓

みな
怖れて
いるのは
老いてから
邪魔物扱いに
果てには無関心
檸檬の絞り滓
捨てられて
存在すら
透明で
無視

仏教
の教え
をわたし
信じている
みなその道を
たどっているし
将来の自分と
思つたらば
優しくし

老人を
守る

凍て鷺

池に
立って
眠る鷺は
朝になって
動けないので
まとわりついた
羽根の隅々に張る
薄氷が溶けるまでは
じっとオブジェの様だ

朝の散歩に来た男性
みなの氷を拳骨で
割ってあげると
喜んで動いて
歩き始める
極寒地方
助ける
習慣

氷の花

湖が
凍って
氷同士が
ぶつかると
氷の花が咲く
薄くふわふわだ
氷が氷を削ってる
凄い音がするだろう
聴いてもみたいし
目で見てみたい
触れてみたい
零下15度の
湖の現象
美しい

雪女

雪女が抱く男は
愛された不幸
凍えて何も
果たせず
熱情も
溶け

女は
心もち
柔らかく
なっている
生気がもどり
声が出てきたわ

眠らないでね
わたし溶け
あなたは
黙って
凍る

夢の抜け殻

森の
サカキ
という木
数年に一度
花を咲かせる
光の差さない森
花をつけるは
相当な力が
必要です
生き方
賢い

この
わたし
一生一度
恋を咲かせ
力を費消して
もう何も残らず
ここに抜け殻あり
森で生きる知恵
光が差す日を

待っている
魂は不死
愛の歌
聴き

甘い毒

甘い
毒の名
恋という
中毒性あり
ダメージあり
一度懲りたらば
二度と近づかない
いま思えば判る
あの人人が悪い
そうでなく
そう思う
わたし
若く

また
懲りず
毒を求め
痺れる快感
他は無価値と
信じ込んでの夢
アオキの毒は

身を守る為
毒を作る
滅びの
美学

毒を
作るも
からだを
使いきる程
激しいもので
生を分かちあう
時を奪い取る
惜しくない
苦しむも
喜びに
なる

狼の一途

狼は
昔から
嫌がられ
童話の悪役
不当な扱いだ
クプリヤノフの
狼の歌を知ったら
その愛の一途さ
切なさに感涙
ペアは一生
家族だけ
群れず
誠実

更に
老いた
父母狼を
捨てないで
巣穴に餌運び
面倒を見ている
人の風上に置いて

学びたいほどだ
もちろん獲物
少く一番に
弱い者へ
だから
細い

樹液

鳥は知っている
冬の樹液は甘い事
毎日毎日吸っている
すると色んな味がある
雨のあと 日照りのあと
朝の味 昼の味 薄さ濃さ
どの樹が美味しかったか
あれは絶品だったとか
ただ空腹を満たし
何となくでない
樹は葉を揺り
小鳥たちに
やさしく
微笑む

愛の薪

埃だらけの
わたしの中に
未だ新品同様の
薪があるでしょう
燃やして暖を取るも
勿論良いのですが
湿っているので
着火が難しづ
煙が出るか
しれない
のです
でもね
わたしは
経験がない
上手な燃え方
美しい見せる法
一旦火が着いたら
消し方も知らない
やはり暖炉の飾りよ

孤独の波

果てしない海の水に
ちゃんと力学がある

ところどころにある
他の2倍以上の高さ
を持つ孤独した波だ

無数の波のなかでも
影響しあった二つが
小さな波を飲み合い
さらに大きくなつて
さらに速く進んで一

孤独な一つの波にと
波の模様に添える為

焚火

失恋
悲しい
歳月あり
せめて詩で
燃えきらぬ心
恋を彩る記憶を
噛み締めつつ
言葉の焚火
息を吹き
暖まる
晩冬

わたしという物質

毎年
やつれ
劣化する
わたしです
止めようなく
止める気もない
それでも来年より
今年の方が若いので
お会いするのは絶対に
一日でも早いほうが
良いに決まってる
花が鑑賞に耐え
自負にも耐え
喜びを与え
思い出の
キスも
残し

夢で
ないと
証明して

今後も生き
長らえていく
そのためにこの
機会は貴重だから
まだ歩けるうちにと
最後の贈り物を届けに
EMSで送れない物質
PCで送れない物質
わたしという物
それを届けに
行くのです
青い翼に
乗って
行く

わたしは女

寂しさ
大好きな
俳句たちが
わたしの胸で
育てていた蛢が
飛び立っていった
わたしだけのものが
今や万人のものになり
寂しさが募り眠れず
桜が咲き初める前
冷たい雨が泣く
いやだと泣く
京都の春は
そこまで
来てる

でも
翻訳者
といえど
わたしは女
情愛に弱い女

愛されての錯覚
求められての狂気
ただ虚構と現実の間
すっぽり嵌って身動が
全くできないのです
できることは俳句
それもダンテの
ことばで生き
喜怒哀楽を
ともにし
最後迄
お供

夢でなく

夢の本
沢山生れ
手を離れる
皆生き生きと
飛んで自由世界
もうわたしの手に
残る蛍はわずかです
お前たちの母は遠くの
ローマの父に会いにいき
完結の報告をするのです
夢でなく本当に行くのです
それまでにお前たちには
良い服を着せ教育をし
恥ずかしくないよう
努力をしましょう
立派な世界一の
お父さんです
楽しみにね

夢の余波

夢のなかで
感じたよりも
もっと大きくて
もっと快い幸せが
その後で押し寄せる
だからいつまでも
夢見ていたいと
思っていても
愛する人は
どう思う
次の波
来る

青い翼

何も思わず
青い翼に乗って
夢を果たしに行く
いうべきことはない
するべきことはやった
皆と同じように生き
気楽に暮らしたい
贅沢はしないが
一人ではない
もっと命に
縋っても
良いか

終章

交響曲
終わり方
凄まじくて
終わりそうで
終わらないけど
名残惜しくも
もう次の音
出さない
指揮者

それに
くらべて
長編小説は
なんと静かに
しんめりと終る
読み人の心は
号泣を抑え
印象的な
一説が
雪崩

雨傘

一回転した
きみの喜びの
周り一

傘を回すと
雨粒がスピン
そのように彼は
わたしの喜びの為
回っていたのだ
たしかにそう
夢中で喜び
もっとと
せがみ
続け

でも
わたし
悪くない
素直に喜ぶ
しし座の女で
普通に振舞って

ここまで來た
ただ喜んで
欲しいの
分かち
合う

クロノス

クロノスは知つてた
いつかある詩人が
戦いを挑むこと
それが今だと
無連続流体
刻み刻み
肉体を

滅ぼす
時という
魔物に挑む
止める方法は
逆進する方法は
ないと分かつても
戦いを挑んだからは
負けられないのだ
武器はただ一つ
愛だけである
そして方法
言葉の力
魔には

魔だ

甘い魔物

ことばは魔物
わたしは痺れて
ついには無感覚に
しばらくは夢遊空間
なんという甘い魔物だ
無力にしたダンテは
身もこころも奪い
わたしはいまも
虜になってる

春の宵

眼つむれば若き我あり春の宵 高浜虚子

室温19度
素足でいても
着込まないでも
暑くも寒くもない
何の不足不満はない
桜が刻々と膨らんでる
春の宵に眠れようわけがないし有り難いことだ
京都の宵は長いので
高瀬川の辺を歩き
三条大橋を渡り
夜明けの甘い
香りに酔い

どこかに
置いてきた
ときめく思い
焦がれる情感を
探しに行きたくて

せめても春一夜
京女の精一杯
あなたには
見せたい
と思う

落着

城南宮
枝垂れ桜
満開の春に
その横の芝で
こぼれる赤い椿
寒い日も彩り
寂しさ埋め
苑の女王
だった

さても
用済みの
落花止まず
命の交代みる
コントラストに
写真家が挑む
どんな風に
落着する
だろう

桜を抱く

京都は
桜の開花
足踏みして
寒の戻りだと
もはや諦めてる
いつもそうなのだ
花が咲こうとすれば
寒くなり震えるし
花が咲けば必ず
散らす雨降る
満開には嵐
こうして
桜への
恋情

募り
普通の
花でない
夢さや運命
障害だらけで
諦めを知り

期待破れ
悲しく
抱く

共感
若くに
散る生命
漫然と生き
誇る花でなく
切実な桜に
愛だけが
応えて
抱く

時の縛り

数字は
物や事を
有限化する
思いや愛には
数値化なじまず
それでも機会の数
一生で何度など
数えることが
あつたりし
質も量も
無理に

それで
夢などは
掻い潜って
有限化させず
他の干渉許さず
朗らかに生き抜き
時の縛りに戦う
指揮は愛のみ
武器は一つ

ことばだ

二人で

すみくらまりこ（日本）

詩人、エッセイスト、翻訳家。1952年京都生れ。立命館大学文学部卒業。日本国際詩人協会代表。国際詩誌「詩の架け橋：天橋」編集主幹。翻訳：国内外の現代詩人作品を翻訳。JUNPA BOOKS シリーズを手がける。『御名を唱えて』（原著 Gabriel Rosenstock の "Uttering Her Name"）は2012年アイルランド文学交流協会より翻訳出版賞を受賞。『弾丸ショート』（原著 Odveig Klyve の "Bullistic"）は2019年ノルウェー文学普及協会（N O R L A）より翻訳助成を下付される。

ダンテ・マッフィアの俳句翻訳。万句集2021 新万句集2023
主な著書：『心薫る女』『夢紡ぐ女』『光織る女』『愛装ふ女』『地抱く男』（いずれも竹林館）2010年第49回ストルーガ詩祭（ストルーガ、マケドニア）、2011年ヤン・スムレク国際文学祭（ブルティスラヴァ、スロバキア）、2015年コモ詩祭—Europa in Versi—（コモ、イタリア）、2015年ミハイ・エミネスク国際詩祭（クラヨバ、ルーマニア）、2019年プリマ・ヴィスタ国際文学祭（エストニア、タルトゥ）に招待参加。

受賞歴：2017年セルビア、パンノニアン・ゲレブ詩祭出版賞を受賞。2018年オーストリア・ウィーン国際文学祭ミロシュ・ツルニヤンスキ一賞、ナジ・ナーマン文学賞（名誉賞）、2020年ヨーロッパ科学芸術文学アカデミー国際詩賞 他受賞。



すみくらまりこ詩集
春

Mariko Sumikura ©

The first edition

Publisher: Japan Universal Poets Association

All rights reserved

ISBN 978-4-911038-25-3 0092 ¥1500E